

大学等名	高知大学
テーマ名	テーマ5：人材交流による産学連携教育
取組名称	課題探求能力育成型インターンシップの開発 - コラボレーション型インターンシップ(CBI)授業システムの全学導入 -
取組学部等	全学
取組担当者	人文学部教授 池田啓実
取組期間	平成16年度～平成17年度
Webサイト	http://www.kochi-u.ac.jp/JA/GP/

取組の概要

インターンシップには学び動機を向上させる機能がある。ところが、従来の体験型(2週間程度)では、この機能の発揮は不十分である。他方、社会性や課題探求能力の脆弱さも今日の教育課題となっている。コラボレーション型インターンシップ(CBI; Collaboration based Internship)授業システムは、これら諸課題を克服する学習方法と教育方法のプログラムであり、インターンシップの革新である。CBI授業システムの特徴は、最長4か月にも及ぶ長期のインターンシップを行うのに必要な「意欲」と「本気」の形成を支援する事前学習(CBI企画立案)、実習(CBI実習～)が受入機関と学生双方に高い成果をもたらすための実習支援、事後学習として、実習の体験が学び動機の向上に結びつくための振り返り(CBI自己分析)と成果公表にある。これらが有機的に連携機能することで、学び動機、社会性や課題探求能力の向上が実現される。

実施の経緯・過程

取組の実施状況

CBI授業は、事前学習のCBI企画立案(1年次2学期・2単位)、CBI実習～(1年次春期休暇期間～2年次夏期休暇期間までの期間のうち最大4か月・8単位)、事後学習CBI自己分析(2年次9月期集中講義・2単位)で構成されている。

第1期(平成16年10月～平成17年9月)～第3期(平成18年10月～平成19年9月)のCBI企画立案受講者数およびCBI実習者数は以下の通り。なお、第3期から県内の中山間地域をフィールドとする「いなかインターンシップ」と岐阜が実習地域として新たに加わった。

- 第1期(平成16年10月～平成17年9月); CBI企画立案; 12名、CBI実習; 6名
- 第2期(平成17年10月～平成18年9月); CBI企画立案; 19名、CBI実習; 9名
- 第3期(平成18年10月～平成19年9月); CBI企画立案; 32名、CBI実習; 13名

教育課程・教育方法の工夫

平成19年9月をもって、3期目のCBI授業(CBI企画立案、CBI実習～、CBI自己分析)が終了。毎期の実践を通してプログラムの改良を図り、3期目は以下のような内容で実施した。

● CBI企画立案(事前学習)

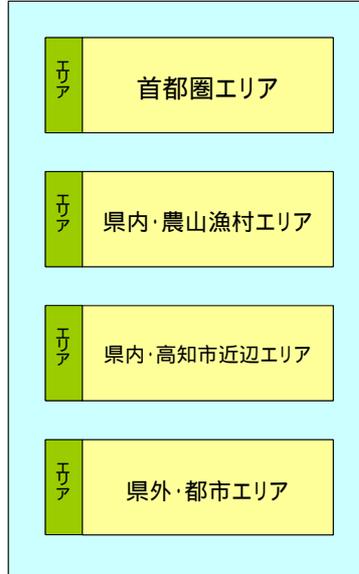
第1期、2期の実践を通して、長期(最大4か月)でかつ首都圏・岐阜など県外や自宅からは通えない県内中山間地域での実習も対象としているCBI実習の場合、実習生にもっとも必要な素養は、実習に対する「本気」とそれをやりきるという「覚悟」であることが明らかとなった。

実習に対する上記の2つのマインドを形成するため、CBI企画立案は、以下の点を基本コンセプトに授業を構成している。(第3期の構成は次頁の図を参照)

- (1) 自らの仕事が他者の幸福実現に繋がることを意識されている首都圏や県内の社会人の方を師匠とする寺子屋方式の活用
- (2) 少人数による徹底したワークショップの実践

CBI実習の多くは企業で行われるが、企業犯罪が連日マスコミを賑わす状況からか、近年の学生には「ビジネス 悪徳」と感じている学生も少なくなく、当該授業の受講生も例外ではない。それゆ

え、ビジネスの現場においても、「人々の幸福実現を明確に意識し、追求すること」が幸福な社会実現への有効な手段である。これを受講生に体感してもらうことが、実習に向けた「本気」と「覚悟」の形成にとって必要不可欠な条件となる。この課題に対応するため、授業の支援講座として、「社会活動入門講座」と「社会活動入門セミナー」を別途開催している。後者の授業は、受講生6名～8名と現役のファシリテータ（議論の促進者）役の社会人1名で構成するチームでのワークショップを、2日間集中的に実施する方法を採っている。



● CBI実習 ~

実習は1か月の実働20日をもって2単位を付与とするが、CBI自己分析の受講が単位実質化の条件となっている。なお、実働の客観的資料として出勤簿と日報の作成を必須とし、受入機関への協力をお願いしている。

長期かつ生活圏を離れて行うCBI実習の成果を高めるため、CBI実習は学外のインターンシップ支援機関との協働実施としている。県内のいなかインターンシップは、このプログラムを開発した(株)南の風社、首都圏はNPO法人ETIC.、岐阜はNPO法人G-netである。これらの機関は、実習のマッチング、実習中のケア、受入先の支援者(スーパーバイザー)と本学とのミーティングに関するコーディネートなどを担う。

実習中は、実習生支援と実習評価の参考情報収集を目的に、本学の担当者が事前(新規受入の場合のみ)、中間、事後の2~3回受入機関に出向き、実習生の状況についてモニタリング(スーパーバイザーとの面談、実習生を交えた3者面談)を行っている。

第3期CBI実習およびCBI自己分析の実施時期パターン

実施パターン	インターンシップの実施内容	実習時期	単位(教養科目・社会系)	自己分析 成果プレゼン
マッチング用インターン ・時期: 春休みの2週間 ・エリア: 県内都市	主には、高知県中小企業家同友会が行うインターンシップで、CBI実習のマッチングも兼ねた2週間のインターンシップを行う企業が対象。 全学部適用可能。	2月中旬～3月末までの2週間 (1か月インターンへの転換可)	CBI実習単位認定対象外	自己分析なし
1か月フルコミット型インターン ・時期: 春休み期間 ・エリア: 首都圏以外	春休みの間1か月フルコミット型インターンシップ、フルコミットとは、週5日全日勤務のこと。マッチング用インターンシップを継続して1か月とする場合は、マッチング用2週間も期間にカウント。 このケースは首都圏を除くエリアで実施可能。 全学部適用可能。	2月中旬～3月末までの1か月	CBI実習単位 実働20日 = 2単位 計2単位	3月末～4月上旬
4か月フルコミット型インターン ・時期: 4月～7月(週5日) ・エリア: 首都圏 & 農山漁村	4か月のフルコミット型インターンシップ。実施エリアは、主に首都圏。この他、県外・都市エリアや県内・農山漁村エリアも可能性あり。 県内・都市エリアは、同一企業等に複数名が参加可能な場合は可能性あり。 学年積み上げ型の必修授業がある学部に通ずる(理学・教育・農学)。	4月～7月末までの4か月	CBI実習単位 実働20日 = 2単位 計8単位	9月中旬
6か月パート & フルコミット型インターン ・フルコミット時期: 春休み & 夏休み(各1か月) ・パートタイム時期: 4月～7月(週3日実働) ・エリア: 県内都市	春休みと夏休みは各1か月のフルコミット型インターンシップ(計4単位)、学期中の4月～7月までの期間は、週3日全日勤務のパートタイム型インターンシップ(計4単位)を併用するタイプ。 学年積み上げ型の必修授業がある学部に通ずる(理学・教育・農学)。	2月中旬～8月末までの6か月	CBI実習単位 実働20日 = 2単位 計8単位	9月中旬

● CBI自己分析(事後学習)

CBI自己分析は、3日間の日程で、春期休暇期間での実習者を対象とした4月期と4月以降の実習者を対象とする9月期の2回の実施としている。基本的な構成は、以下の通り。なお、成果報告については、2学期の履修申請時のCBI授業説明会を活用し、両期合同で実施している。

* 1日目; KJ法、組織論等を活用しての実習経験の共有化、俯瞰化、概念化

* 2日目；実習の振り返りプレゼンと自己効力論等を活用した今後のアクションプランの検討

* 3日目；今後のアクションプランのプレゼン及び成果報告会実施方法に関する検討

実施体制

C B I 企画立案は、授業実施に必要な学内外の関係者コーディネート、授業環境の整備を担当する統括教員1名とその補佐役の教務支援員2名の統括グループの他、演習（少人数グループ）のファシリテートを担当する教員と学生ファシリテータ（学生F T）、師匠役の社会人コーディネートを担う学外機関との協働で実施としている。第3期は、演習教員10名（F D教員含む）、学生F T16名（1演習2名）で実施し、演習時間外の学生討議支援は学生F Tの担当とした。

目的に対する成果、人材養成面での達成度

目的に対する成果

C B I 授業の目的は、学び動機、社会性（組織や社会への貢献）や課題探求能力の向上である。これらは、以下のような状況から概ね達成されていると考えている。

C B I の実習を行った学生のほとんどは、「授業を受けたい」という渴望感を味わう。長期のインターンシップを行う中で、知識の必要性、学ぶことの大切さがリアルに理解できるからである。それゆえ、実習生が、授業に積極的になることはむろんのこと、インターンシップが契機となって留学するケースまで生まれている。

C B I 実習の受入機関の多くは、人の幸福を実現するためのビジネスを意図するベンチャー企業である。社会性の高い組織での長期の実践は、学生に「社会性」の真の意味を理解する機会となることから、多くの学生は実習後に、自らが関心のある社会的課題の解決を目指す活動を行う。たとえば、高知県奈半利町の地域NPOで実習を行った学生は、その後、仲間を募り、「奈半利サポータークラブ」を設立し、実習後も地域課題解決のための協働を継続していたり、新入生支援のための情報誌発行のため「ぼうしぱん」という学生組織を設立したケースなどがある。

就職等への影響

C B I は、1年次を対象にした授業であったため、試行的色合いが強かった第1期の実習者が平成20年3月に卒業を迎える状況である。そのため、就職への影響はまだ明確にはなっていないが、県内新聞社の記者として採用が決まった学生など、概ね順調な就職状況ではある。

自大学の教育改革への影響、他大学等への波及効果、地域社会等への波及効果

本学の教育改革への影響

C B I 授業の取組を通して、大学入学時、自分を肯定できない新入生がかなり存在することが分かってきた。長期のインターンシップを目指す学生母集団を拡大するには、自己を肯定できる学生層の拡大が不可欠と考え、1年次1学期に新入生を対象とする「自律協働入門」（平成18年度の文部科学省・特別教育研究経費に採択）を新たに開発した。この授業は、社会人の生き方を聴く講義とその意味を理解するための演習（少人数でのワークショップ）を隔週で開講するという、全国初の形式に最大の特長がある。さらには、平成20年度に向けた学士課程の教育改革にも影響を及ぼし、自律協働入門の成果も反映した課題探求セミナーとしてすべての新入生が受講できる環境作りの検討がなされている。

広報活動の状況

C B I 授業については、毎年、報告書（ブックレット版）を作成し、教員や保護者など学内外の関係者への広報として活用している。また、高校生向け入試情報誌やホームページを活用した広報も行うなど、広く社会に成果を公表してきている。

他大学への波及効果

これまでに、C B I に関心のある大学の訪問も数多く受けている（平成19年度は9月時点で3大学）。

その中から桜美林大学(東京)が、本学と同様の理念に基づいたインターンシップを平成19年度入学生を対象に実施することになり、CBIの姉妹校が誕生した。この他、国立女性教育会館主催の女子学生就職支援セミナー(平成18年度)への講師派遣や、筑波大学(平成18年度)、龍谷大学(平成19年度)の教員FDフォーラムにも統括教員を講師として派遣するなどの協力も行っている。

地域社会への波及効果

CBI授業は、当初から地域の若者支援を目指すNPO法人からも注目を集め、飯塚、大阪、岐阜(平成17年度)、東京(平成16・17年度)、熊本(平成18年度)のNPO法人等が主催するフォーラムに講師派遣などの協力を行ってきている。また、第3期の実習先として加わった「いなかインターンシップ」の成果により、実習後も継続して学生が地域課題を解決する協働者となるなど、地域(とくに過疎地)がもっとも必要としていた人材の輩出にも寄与するなどの効果をもたらしている。

学生等の評価

受講による能力変化に対する自己評価

CBI企画立案、CBI自己分析では、受講者に「自分の思いプレゼン」資料の作成を義務づけ、冊子化し、保存を図っている。その資料には、彼らのほとんどが受講によって「人生への考え方」が変化したなどの自己分析結果が多数見られるなど、受講生からも高い評価を得ている。また、受講者の思考行動特性や知識技術的特性の要素が、授業によってどの程度変化したかを測定する自己評価型ツール(EIPアセスメント)をNPO法人ETIC.と共同開発し、授業成果を定量的にも分析している。

学外からの評価

受け入れ機関のスーパーバイザーからの評価

「本気と覚悟」を備えた実習者を送り出していることから、受入企業のほとんどがCBI実習者は無条件で受け入れたいと表明してくれるなど、受入機関のスーパーバイザーからは、大変高い評価を受けている。

地域からの評価

第3期の実習から加わった「いなかインターンシップ」により、県内の中山間地域から教育(学生)を軸とした大学との連携を切望する動きが急速に広まっていくなど、これまでの研究(教員)を軸とした地域連携に新たなアプローチが生まれたとの評価を頂いている。

報道の反応等

CBI授業は、県内のマスコミ(高知新聞、NHK)をはじめ、日本経済新聞(Web版含む)、中日新聞などにも取り上げられてきている。

取組支援期間終了後の展開

取組の成果を活かした継続的な事業の実施状況

取組支援期間終了後は、外部資金(平成18年度経済産業省・地域産業活性化人材育成事業など)や学長裁量経費を活用し、CBI授業を継続し、さらにCBI企画立案の授業内容の改善、実習先フィールドの開発(岐阜、いなかインターンシップ)、CBI自己分析授業の精緻化を図っている。

新たな事業展開の計画等

CBIの理念に共鳴する大阪・愛媛の中間支援機関と協働し、フィールドの一層の拡大を図る。

本件お問合せ先 高知大学学務部学務課(CBI担当)

TEL ; 088-844-8652 E-mail ; jm-shimizu-m@kochi-u.ac.jp